

第4学年 道徳科学習指導案

4年4組 27名
指導者 高見 寛子

1 主題名 本当の思いやり

B－(6) 親切、思いやり	相手のことを思いやり、進んで親切にすること。
------------------	------------------------

2 主題設定の理由

(1) ねらいや指導内容について

思いやりとは、相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量り、相手に対してよかれと思う気持ちを相手に向けることである。そして、相手を思いやる心に裏付けられた親切な行動は、人と人との温かい交流を生み、豊かな人間関係を築くための土台となるものである。この時期の児童は、困っている人を見ると、思わず手を差し伸べたくなる。他の人の気持ちは自分の気持ちと同じであると思い込んでしまうこともある。そこで、相手意識をもった親切が重要だと考える。自分がよかれと思う親切ではなく、相手の気持ちや考えを尊重することの大切さに気付き、誰に対しても親切にしていこうとする児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

(2) 児童の実態

本学級の児童は、困っている人がいれば助けてあげようとする前向きな気持ちをもっている。理科のモーターカーの組み立てや図工科の作品作りでは、なかなか進まない友達に対してすぐに手を貸してあげるなど、親切な行動を積極的に行おうとする姿も見られる。今後、児童は、学校生活を中心として、友達同士の交流が活発になるとともに、活動範囲が広がり、地域や社会との関わりも増えてくる。

そこで、親切には様々な形があり、相手のことを考えた思いやりの心や親切が、よりよい人間関係を築く基盤となることに気付かせたい。また、周りの人に親切にしたいという気持ちを大切にするとともに、相手意識をもって親切にしようとする態度を育てたい。

(3) 教材について

(教材名 「せきが空いているのに」

出典：小学 道徳 豊かな心 光文書院)

この教材は、ぼくが親切とは自己満足ではなく、相手の気持ちや望んでいることを考えて行動することが大切であるということを学ぶ話である。父と電車に乗っているぼくが白杖を持ち立っている人と出会う。その人のことを思って席が空いていることを父に伝えてもらうが「誰の助けも借りずに電車を降りるには、ここに立っているのが一番都合がよい」と言われる。相手のことを尊重し、声をかけた父の行動から、相手の思いや気持ちを考えた親切の大切さを感じることができる。自分本位の親切から一歩進んで相手の思いに寄り添った親切とはどういうことなのかを考えることで、ねらいとする価値に迫りたい。

(4) 主体的に考え、伝え合い、響き合うための工夫

事前にアイマスク体験を行い、目の不自由な人の気持ちに寄り添い、自分事として考えることにより、登場人物の白杖を持ったおじさんの状況を理解できるようにする。さらにその状況を踏まえ、心配するぼくの気持ちに共感することで、ぼくの考える親切への捉えを明確にする。

お父さんの言葉を聞いて、ぼくが考えたことをペアや全体で話し合う場を設定する。お父さんの話に込められている白杖のおじさんの思いから、親切にすることはどういうことかを話し合う。親切には、直接手を差し伸べるだけではなく、様々な形がある。親切について多面的・多角的に考えることで、自分の考えを深めることができるようにする。